

第13回太平洋芸術文化祭の報告

安井眞奈美（国際日本文化研究センター）・山本真鳥（法政大学名誉教授）

1. ハワイ州オアフ島での開催

2024年6月6日から16日まで、第13回太平洋芸術文化祭¹（Festival of Pacific Arts and Culture; FestPAC、以下「芸術祭」とする）がアメリカ合衆国ハワイ州のオアフ島にて開催された。芸術祭は当初2020年に開催予定であったが、COVID-19のパンデミックの中、早々に4年後への延期が発表されたため、今回は2016年にアメリカ合衆国グアム準州での第12回以来、8年ぶりの開催となった。25の太平洋島嶼国と地域から3,000人を超える人々が参加した。

芸術祭は、太平洋島嶼地域の芸術と文化の交流と地域の連帯をはかる目的で1972年にフィジーのスヴァで始まった²。それぞれの国と地域を代表するダンスや現代音楽などのパフォーマンスが披露され、彫刻や手芸品などの展示・販売、タトゥーの実演、ファッション・ショー、詩や朗読、舞台芸術映画の上演、太平洋地域のリーダーに関する若者のシンポジウムが開催されるなど、演目は多岐にわたる。また予め、い



写真1 パラオ代表団のダンス、ウインドワード・モールにて

¹ 第11回までの芸術祭の名称は「太平洋芸術祭 (Festival of Pacific Arts)」であった。前回の第12回以降、タイトルに「文化」が加えられるようになった。

² 1972年に始まった太平洋芸術祭は、山本真鳥の報告に詳しい（山本2000）。2000年以降の開催地は2000年第8回 ニューカレドニア スメア、2004年第9回 パラオ共和国 コロール、2008年第10回 アメリカンサモア パゴパゴ、2012年第11回 ソロモン諸島 ホニアラ、2016年第12回 グアム アガーニャ。

くつかの地域から開催地に向けてカヌーが航海し、これらのカヌーを迎えることは芸術祭において重要な意味を持つ。カヌーは、太平洋島嶼国と地域の人々を物理的にも象徴的にもつなぐ重要な役割を果たしてきたからである。これらの演目が 10 日間から 2 週間にわたる会期中にさまざまな場所で実施され、参加者のみならず開催地の人々も、太平洋島嶼地域の多様なパフォーマンスを存分に楽しめる機会となっている。

芸術祭のロゴ・マークとテーマは、ホスト国・地域が設定する。ハワイ州が提示したテーマは“Ho‘oulu Lāhui —Regenerating Oceania”「オセアニアの新たな誕生」である。「太平洋島嶼国と地域を超えてアーティストたちが集い、太平洋文化の精神を取り戻すことを約束する」という意味が込められている³。1972 年の芸術祭開始から半世紀を経た、COVID-19 後の 2024 年にふさわしいテーマと言える。

著者の安井眞奈美は、これまでミクロネシアのパラオ共和国にて調査研究を続けながら、2000 年以降の芸術祭を訪れ、2004 年にパラオで開催された第 9 回以来今回まで、パラオ代表団のメディア・スタッフとして写真や映像を記録してきた⁴。山本真鳥は 1996 年以来、芸術祭を訪れ、サモアを中心に太平洋地域の研究を幅広く続けている。今回二人で、これまでの太平洋芸術祭で得た知見を含め、第 13 回太平洋芸術祭の様子をいち早く報告することにした。詳細はまた別の機会に譲りたい。

2. 開会式とパフォーマンス

芸術祭は、参加国と地域を出発し、開催地に到着したカヌーを迎えてから始まる。開会式前日の 6 月 5 日早朝に、オアフ島北東部海岸のクアロア・リージョナルパーク（以下、クアロア公園）にて、Wa‘a（ハワイでカヌーを指す語）を迎える儀式が開催された。今回、カヌーで航海してきたのはタヒチ（フランス領ポリネシア）とクック諸島のみであったが、カヌーの関係者を中心に、歌とダンスによる歓迎の儀式が行われた。参加者が従来に比べて少数であったのは、会場のクアロア公園が、オアフ島東海岸の移動の難しい場所にあり、しかも歓迎儀式が早朝に行われたからである。

カヌーの歓迎の儀式を終えて、翌 6 月 6 日夕刻から芸術祭の開会式が開催された。会場は約 1 万人の観客を収容できる多目的アリーナ、ハワイ大学マノア校キャンパス内のスタンシェリフ・センターである。各地域の代表団は、ハワイ州から無償で提供されたハワイ大学の寮に滞在していたため、開会式当日は午後 2 時には寮を出発し、歩いて 15 分ほどの会場に向かった。アリーナの入口付近で、早くも大声で歌い始める代表団があり、それが他の代表団にも連鎖してアカペラの大合唱となった。

開会式は、芸術祭の主催者や大会ディレクターによる挨拶から始まり、目的や概

³ 13th FestPAC Palau Delegation Travel Packet のパンフレットより。

⁴ 2012 年、2016 年には小西潤子氏とともにパラオのメディア・スタッフとしてソロモン諸島、グアムにて記録を行った。小出光氏は 1985 年から欠かさず映像を記録している。

略が説明される。開会式の主眼は各国・地域の代表団がアリーナに登場してダンスと歌のパフォーマンスの“さわりの部分”を演じ、正式なホストのハワイ州知事夫妻に贈り物を献上することである。本来“さわりの部分”のパフォーマンスは5分程の予定だが、熱が入ると3～5演目で20分以上かかってしまう。そのため開会式は、夕刻から予定を大幅に超えて深夜に及ぶ。

これまでの芸術祭では、代表団は国・地域名のアルファベット順に登場することが多いが、今回はいつもの逆に行われたので、前回の開催地域であったアメリカ合衆国グアム準州のあと、最初に台湾、その後ワリス・フツナ、ツバルへと続いた。加盟25か国のうち、ヴァヌアツ、ピトケアン、ニューカレドニアは不参加であった。

各国・地域からハワイ州知事夫妻へと献上された贈り物は、次々とアリーナに並べられた。たとえばトンガの代表団は、パフォーマンスをしながら巨大なタパ布（樹皮から作られる布）を運び、贈り物として献上した（写真2、3）。



写真2 トンガの入場

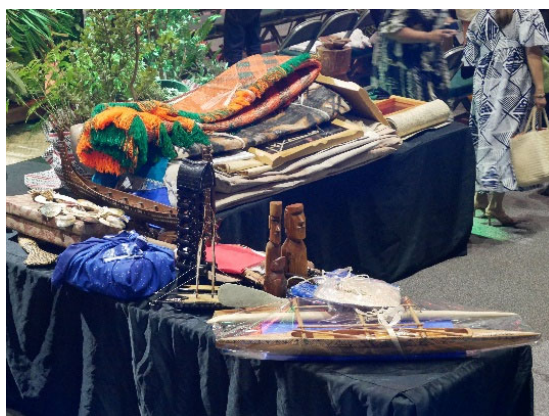


写真3 献上された贈り物の数々

かつて2004年にパラオの野外球場で行われた開会式では、途中大雨が降り、パラオの二人の女性首長が深夜近くまで本降りが続く中、各代表団から贈り物を受け取っ

ていた。しかし今回は、空調の効いた涼しい会場であったため、天気や暑さを心配する必要は全くなかった。「寒すぎる」という声も聞かれたほどで、アメリカ合衆国の水準に合わせた開催と言える。

ところで今回の芸術祭に参加した台湾の代表団は、2004年に開催されたパラオでの第9回芸術祭に初めて招待された。開催国のパラオは台湾と1999年に外交関係を樹立し、台湾を承認する数少ない国の一つであったからだ（三田 2021）。コロール（パラオ）のガラマヨン文化センターは台湾からの経済援助で建設され、2004年の芸術祭では台湾の代表団のために特別なイベントも実施された。その後の芸術祭にも、台湾は欠かさず参加し続けている。5度目となる今回は、台湾先住民の舞踊団をはじめ約300人からなる代表団をハワイに送り、存在感を増していた。しかし本来、台湾は芸術祭に参加できるSPC（Pacific Community）の正式なメンバーではない⁵。にもかかわらず、台湾が大勢で芸術祭に参加しているのは、台湾側の強い要望によるものである。台湾は、先住民のダンスや展示を通して、中国の一部ではないネーションとしての台湾を芸術祭でアピールしたいという思惑がある。その根拠となるのが、台湾から太平洋島嶼地域の全域に広まっていったオーストロネシア諸語の存在である。台湾のブースでは今回も、言語学的研究に基づいてオーストロネシア諸語の流布を視覚的に表す地図が展示され、解説のビデオとともに、太平洋島嶼地域との関係を強く打ち出していた（写真4）。台湾政府は、中国政策の一環として先住民のダンスや展示、また考古学や言語学の研究援助に力を入れており、台湾にとって、先住民の文化を尊重するこの芸術祭は、台湾先住民の存在を太平洋島嶼地域の人々に訴えたいへん重要な機会となっている。



写真4 台湾のブース“Discover Taiwan”, “Indigenous People”の文字も

⁵ SPCは太平洋島嶼地域の25の国・地域からなる組織で、1947年発足時の名称 South Pacific Commission (SPC)は1997年にPacific Communityに改められた。略称は、Secretariat of the Pacific Communityからとって、SPCのままである。

3. プログラムと会場

芸術祭は、メイン会場となる芸術村が設置されたハワイ・コンベンションセンターを中心に、オアフ島のさまざまな場所に会場が設置された（図 1 参照）。芸術村には各国の展示ブースが置かれ、彫刻や織物、絵画、椰子の葉で編んだ手芸品、アクセサリー、帽子、衣類などが展示、販売された。これまでの芸術祭では、芸術村は炎天下に設置され、暑い中で強い日差しを避けながら展示が行われてきたが、今回は、空調が効いた室内の薄暗い会場となった。

通常、開催国の各地域が、芸術祭の参加国・地域のホスト・ビレッジとなって交流する催しもあるが、今回は特別に設けられてはいなかった。むしろ、ハワイ州を訪れている観光客にも見てもらえるように、ワイキキのロイヤル・ハワイアン・センターやアラモアナ・センターなど観光客向けの大型ショッピング・モールや、オアフ島北東のカネオヘの地元の人々のショッピング・センターであるウインドワード・モールなども会場となった。買い物客も、しばし足を止めてダンスに見入っていた（写真 1）。

ビショップ博物館では彫刻の実演と展示、タトゥーの実演が行われ、ハワイ州立美術館（Capitol Modern）では、芸術祭 50 年を振り返る写真展にて、1972 年にスヴァ

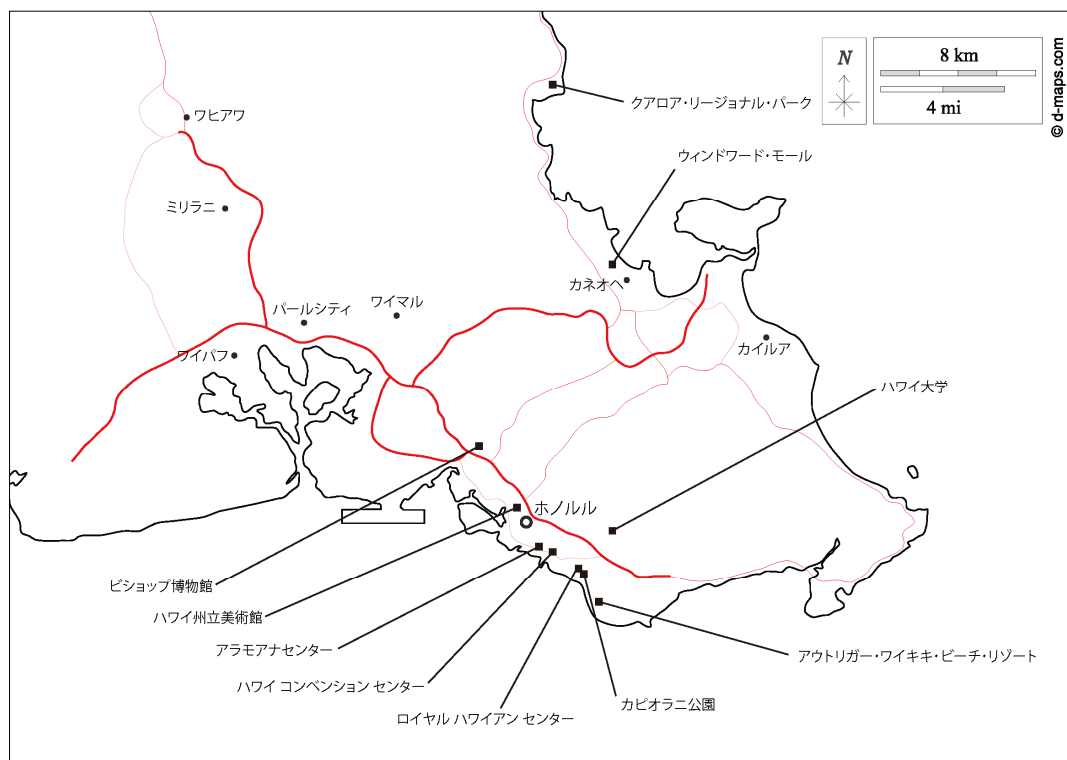


図 1 太平洋芸術文化祭の各会場地図（赤線は主要道路）

で始まった第1回芸術祭の貴重な写真やプログラムなどが展示された。

このように芸術祭の会場は、ワイキキのショッピング・モールなども利用し、芸術祭の開催を知らない地元の人々や観光客も楽しめる工夫がなされた。しかし、これまでのように各代表団が開催国の人々と交流する機会などは設けられなかった。むしろハワイの観光客が偶然、芸術祭のパフォーマンスを見ることを期待した会場設営だったと言える。カヌーの会場となった北東海岸のクアロア公園は、芸術祭の中心から離れたアクセスしにくい場所で、多くの人々がカヌーの催し物を見学できなかった。

なお、代表団の宿泊先のハワイ大学寮の近くからはシャトルバスが運行しており、コンベンションセンター、ビショップ・ミュージアムなどを巡回していた。それ以外の会場の移動には、パフォーマンスをする代表団のためにバスがチャーターされた。

4. Wa'a カヌーを迎える

アクセスが困難であっても、オアフ島北東海岸のクアロア公園では、毎日 Wa'a（以下、カヌー）に関する催しが行われた。6月7日、パラオの航海士4人とともに、筆者も会場へ向かった。この日午前中にワイキキ・ビーチで競技カヌーに参加した各国・地域の航海士たちは、そのままカヌーでクアロア公園へ移動し、海岸で待ちかまえた人々によって歌とともに迎えられた。カネオヘ湾には、古代ポリネシア式の帆走カヌーとして1975年に完成し、クアロア公園で進水したハワイのホクレア号も停泊していた（内田2007, 25）。



写真5 カヌーの製作実演

会場では、各国・地域の航海士たちが、丸太を削って一緒にカヌーを製作する実演が行われ、力強く斧で削る様子を大勢の人々が見入った（写真5）。航海士たちは久しぶりの再会を喜び、カヌーに関する情報交換を行っていた。海岸のテントでは、

伝統的な航海術の根拠となる星座の運行や、シングルアウトリガー・カヌーとダブルアウトリガー・カヌーの構造などについて説明がなされた。

人気があったのは、カヌーに乗船してカネオヘ湾を遊覧できる催しであった（写真 6）。長い行列ができ、人々はカネオヘ湾から雄大なクアロアの山の眺望を楽しんだ。またハワイのスタッフたちが子どもや若い人々を順番にカヌーに乗せていた。カヌーと海の魅力を知ってもらうには、実際に体験することが一番だというわけである。



写真 6 カヌーに子供たちを乗せて海に出る

パラオにはハワイから贈られた貴重なカヌーがあるが、修理が必要なため、今回、カヌーでの参加は諦めたという。芸術祭に参加したパラオの航海士 4 人は、2022 年にミクロネシア連邦ヤップ州から長老の航海士を招待して、伝統的な航海術を伝授し、航海士の仲間入りをするポと呼ばれる儀礼をパラオで行った。このときクック諸島、ハワイからも航海士が加わり、合計 7 人がポの儀礼に参加している。筆者が、1997 年にミクロネシア連邦チューク州の離島・ポンナップ島で見る機会を得たポの儀礼では、サタワル島から招かれた長老の航海士が、5 日間にわたり星と風の読み方を伝授し、儀礼後は皆でダンスを盛大に踊って、航海士たちを祝った。ちなみにポンナップ島の人々は、ミクロネシア連邦の代表として、芸術祭にてダンスを披露している。

パラオの航海士たちは、「モーターボートですぐに目的地に達する効率のよさを手に入れた現代人は、再びカヌーの重要性に気づき始めている」という。彼らは、クアロア公園を訪れた人々だけでなく、芸術祭のレクチャーやシンポジウムなどさまざまな機会を通して、カヌーの魅力を多くの人々に伝えていた。

（安井 眞奈美）

5. 現代アートとその展示

芸術祭のプログラムに視覚芸術が加わったのは、1996年開催のアピア大会（西サモア）以降である。正確にはヴィジュアル・アートというカテゴリーになっているから、必ずしも現代アートに限らないのであり、古典的な博物館にあるキュリオ（いわゆる古典的太平洋芸術の作品、つまり骨董的仮面、彫刻、船模型など）が展示されたこともあるが、アガーニャ（グアム）大会、ホノルル（ハワイ）大会では、現代作家の作品が主体となっていた。初回のアピア大会の際にも、ヌーメア（ニューカレドニア）大会の際にも、当時の新しいオセアニア・アートの展示が多く見られたが、そうしたプログラムの趣旨の違いは、どの大会でもそれぞれ特徴がある。また、大会主催者（各主催国・地域）や責任キュレーターの能力やもっているネットワークの問題があるろうか。さらに展示場のキャパシティーも問われる。

また、伝統的彫刻や工芸品、タトゥーなどの実演も視覚芸術であることは間違いないが、今回はビショップ博物館での実演となり、残念ながら見に行く機会がなかった。現地では、歌とダンスのプログラムと併設されていたが、それらに比べて低調であった、とは見に行った人の話である。また、伝統的彫刻などは、いわゆるヴィレッジ（お土産品などそれぞれの国・地域の特産品を売る店舗。各国・地域が小屋のような開放的建物をひとつずつあてがわれる）の一角で、彫刻や工芸品の作成を行うことが多かった（グアム大会では、多くのヴィレッジの中で行われていて、人気もあった）が、今回それが実施されていることは少なかった。これまでは、野外に設置されることが普通だったが、今回は大講堂の中で、照明も落としてあったので、いつもとは違った。

今回、オフィシャルに用意した視覚芸術の展示場は、ハワイ・コンベンションセンター（アラモアナのそば）3階の会場（ここは単に Visual Arts の看板が出ているだけだった）、およびホノルル官庁街にある、ハワイ州立美術館（Capitol Modern）内で、ここでは「Ke Ao Lama（開かれた世界）——第13回太平洋芸術文化祭を祝って」という展示が行われていた。これは、プログラムリーフレットによれば、「PILINA」、「私たちの島々の海」、「Ai ā manō」、「Nā Akua Ākea（幅広い幾多の神々）」の4つの展示からなり、そのほかに、芸術祭との関連で台湾のキュレーターによる「The Ocean in Us（身即是海）」という展示がダウンタウン・アートセンターで行われており、それと併設して他の島々の現代アート展示もあった。公式プログラムにはないこれらの展示は、オフィシャルなプログラムの外にできたいわゆるフリンジ・イベントとでもいうものかもしれない。

さてコンベンションセンターの会場の展示は即売を兼ねているので、値段がついていた。もちろん非売品の作品展示もあったが、多くの作品には個別のアーティストやエージェントの連絡先も出ていて、買いたい人が直接連絡をとることができるよう

になっていた。多くは絵画であるが、タパなどのモチーフや、その地域特有の、あるいは作家特有のタッチで、それとわかるものもある。また描かれているものによってどこの作品かを推測することはたやすいものが多かった（写真7、8、9、10、11）。



写真7 パプアニューギニアの作品の一角。フェイスペイントの絵からPNGであることがわかる。向こう側のパネルには木皮絵が見え、オーストラリアと思われる。



写真8 同じくパプアニューギニア、中央下の作品は、マシアス・カウアゲのサインが入っており、その左と上段右端は、その息子のマイケル・カウアゲの作品らしい。



写真 9 パラオの作品群。右側にあるのがアバイ内部の板絵風絵画。中央の絵には、アバイが描かれている。

次に紹介するのは、アメリカ領サモアのものである。村の高位首長の娘としてのタウポウの扮装をした女性を描く作品である。タウポウはその村固有の称号を持ち、それなりの格があり、結婚するときは、別の村の高位首長またはその息子マナイアと政略結婚するものだったが、現在では、ダンスをするときに主役を務める女性として、1名ないしは数名配置されるのが普通である。当該のタウポウは、ちょっと退屈そうな顔をしたり、満面の笑顔だったり、神妙な風情の処女とは少し違う。



写真 10 アメリカ領サモアの画家のタウポウを描く作品。手法は写実的。

それに対して、サモア出身の画家マウオラが描くのは、サモアの自然や村の表情である。写真は省略しているが、サモアらしい事物が取り込まれている。ウィリアム・マウオラ作品は、マナメア・アートスタジオを通しての出品である。このスタジオからは、石器のレプリカや、かつてサモアで用いられていたクシを再現したクラフトの出品もある。マウオラ自身はレウルモエガフォウ美術学校を卒業、その後国立サモア大学で学んだとみられる。全くのサモア純正である。ネット上の情報では、彼は絵画以外にも、彫刻など、様々な美術作品の制作を行っているので、レウルモエガフォウ美術学校の教育に沿ったアーティストであるといえそうだ。手法は写実ではないが、全くの抽象画というわけではもちろんなく、アンリ・ルソーやグランマ・モーゼスを思わせる素朴な描き方である。

次に紹介するのはソロモン諸島の展示である。絵画等の作品が増えてくるのは最近のことで、グアム大会のときにも、多くの作品が展示されていて、急速な発展に驚いたことであった。



写真 11 ソロモン諸島の作品群。貝の透かし彫り、カプカプや貝貨が見える。

今回の展示は、前回と比べて減少したように思える。グアムのマーク・デリソラの特徴ある抽象画を見たときには、なんとなくうなずいている自分がいたが、それ以外にはカウアゲの作品を見つけて心とんだのみである。もちろん高名なアーティスト参加が、芸術祭に効果をもたらすことは確かであるが、無名の人にチャンスが与えられるのがこの芸術祭の特徴であろう。南太平洋大学オセアニア芸術センターの絵画部門は最近低調であるようだが、フィジーのレッドウェーブ派の出品は全く見られなか

った。また、ニュージーランドの現代アーティストの作品も、マオリ人やパシフィカ（ニュージーランド在住太平洋諸島出身移民）の両方とも全く見る事がなかった。ニュージーランドのパシフィカの活躍には目立つものが多くみられるにも拘わらず、である（山本 2023）。

ただ、ビショップ博物館には、この芸術祭関連ではないが、マイケル・タフェリー（ニュージーランド）の「ピスポ・ルアアフェ」（2000 のコーンビーフ缶）と、バーニス・アカミネ（ハワイ）の「カロ」（タロイモ）が一室に展示されていたのは、大変印象的であった。タフェリーの作品は、コーンビーフの空き缶で作った牛であり、もともと土着ではないコーンビーフが太平洋諸島で儀礼財として盛んに消費され、人々の間にはそのために糖尿病を始めとする病気が蔓延していることを皮肉ったもの。アカミネの作品は紙と岩で作られたタロイモの茎・葉で、岩はハワイの土地の象徴であり、使用されている紙は、ハワイ併合に反対する署名、ハワイ地図が描かれており、先住民運動に関わるアート表現である。



写真 12 2000 のコーンビーフ缶

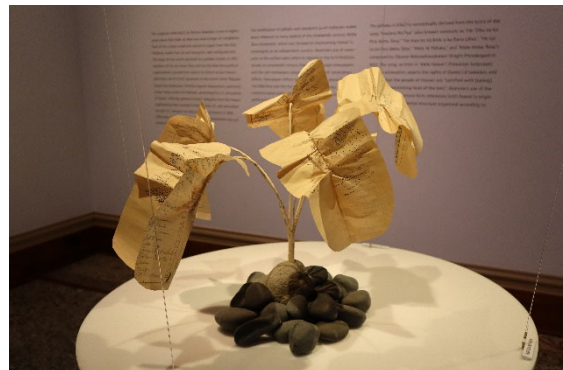


写真 13 カロ

一方、芸術祭のオフィシャルな展示であるハワイ州立美術館の展示「Ke Ao Lama」は、「Our Sea of Islands」（エペリ・ハウオフア著の著名な論文タイトル）（Hau'ofa 1994）が、これまでの芸術祭を振り返る展示（主として写真コレクション）であるのを除いては、ハワイ先住民の作品群である。前者は、1996 年より芸術祭を見守ってきた筆者には思い出深いものがあった。ハワイ先住民の現代美術の活動は、どちらかというとならニュージーランド・オーストラリアよりも遅く始まったという印象がある。ハワイは、むしろ西洋美術と東洋美術の結節点であることが強調される傾向にあり、先住民自身がアートを作ることよりも、部外者が先住民やその文化を描く——もちろんそれ以外のテーマも多くあるが——アートの方が目立っていた。しかしここ 20 年ばかり、ハワイの先住民アートはその遅れを回復するほどに開花している。先のアカミネのように先住民としての反植民地主義的な抗議を込めたものも多いが、そのほかに先住民のかつてのクラフト技術を復興しようとする動きや、それを新しいアートの

中に盛り込むなど、興味深い展開がある。著作権の関係で、ここに個別作品の写真を提供すべきでないと思うので、以下のリンクから、その画像を見ていただきたい。

<https://www.capitolmodern.org/festpac>

ただ、以下の集合写真は許されるであろう。



写真 14 Nā Akua Ākea (幅広い幾多の神々) 展示。多人数のアーティストの合作

また、台湾の先住民アーティストの展示は、以下のサイトで構成を見ることができ
る。アート作品そのものは見られないが、作家の名前から検索が可能であろう。

<https://www.downtownarhi.org/>

その他、正式プログラム外の他地域のアーティスト作品も見ることができる。

(山本 真鳥)

<参考文献>

内田正洋

2007 「現代に生きる伝統、ホクレア号の航跡と未来」国立民族学博物館編『オセアニア 海の人類大移動』pp.25-33, 昭和堂

須藤健一

2007 「オセアニア航海術の伝統と現在」国立民族学博物館編『オセアニア 海の人類大移動』pp.12-18, 昭和堂

三田 貴

2021 「台湾支持を前面に出すパラオ大統領の国連総会演説」国際関係教員によるニュース解説！京都産業大学 2021.09.29 (最終閲覧 2024 年 6 月 27 日)

https://www.kyoto-su.ac.jp/faculty/ir/2021_lir_kyoin.html

安井眞奈美

- 2009 「太平洋芸術祭にみるアイデンティティの創造」吉岡政徳監修『オセアニア学』pp.451-461, 京都大学出版会
- 2015 「太平洋芸術祭への若者の参加と芸術の継承——第 11 回太平洋芸術祭（ソロモン諸島）を中心に」『古事』17: 56-71, 天理大学考古学・民俗学研究室紀要

山本真鳥

- 2000 「第 8 回太平洋芸術祭調査に向けて」須藤健一編『オセアニアの国家統合と国民文化』2: 183-199, JCAS 連携研究成果報告書
- 2023 『オセアニアの今』明石書店

Hau‘ofa, Epeli

- 1994 Our Sea of Islands. *The Contemporary Pacific* 6(1): 148-161.

Yamamoto, Matori ed.

- 2006 *Art and Identity in the Pacific: Festival of Pacific Arts*. (Matori Yamamoto ‘The Eighth Pacific Festival of Arts: Representation and Identity’, pp.5-27) JCAS Area Studies Research Reports no.9. 10+132pp. Osaka: The Japan Center for Area Studies, National Museum of Ethnology.

Yasui, Manami

- 2006 ‘Expressing Pacific Identities through Performance: The Participation of Nations and Territories of Western Micronesia in the Eighth Festival of Pacific Arts’, Matori Yamamoto ed. *Art and Identity in the Pacific: Festival of Pacific Arts*. pp.51-77, JCAS Area Studies Research Reports no.9. Osaka: The Japan Center for Area Studies, National Museum of Ethnology.